

8月3日、白石市社会福祉協議会主催「夏休み福祉体験」の中で、「災害が起きたらどう行動する」と題したワークショップが白石市総合福祉センターで開催された。ワークショップには、市内の中学生26人が参加。講師は白石市出身で東日本大震災後、亘理町の支援に取り組む、島根県海士町のまちづくり支援会社「巡の環」の松島宏佑さん。松島さんは、被災地の状況や思いなどを生徒たちに話し、生徒たちも臆することなく自分たちの意見を述べた。



3月11日午後2時46分、三陸沖（牡鹿半島の東南東約130^キ）を震源とするマグニチュード9.0の巨大地震が発生。世界でも希な巨大地震となった。また、地震に伴って日本列島の太平洋側では津波が発生。各地で大きな被害を出した。この地震と津波による死者数は7月30日現在、15,648人、行方不明者は4,979人とされ、阪神淡路大震災と比べても想像を絶する数となった。しかし、阪神淡路大震災と比較して少ないのはボランティアの数と松島さんは穏やかに話し出した。

災害ボランティアという関わり方

この日のテーマは、「災害が起きたらどう行動する」。まず、松島さんは震災後の亘理町での経験を話した。「親類がイチゴ農家をやっている、なじみが深かった亘理町でボランティア活動に参加することになりました。最初の2週間は、ボランティア活動をしながら何かできないかを模索し、『こんなことやりたいんです。お困りなことはないですか』というスタンスで、ずいぶん失敗もしました。そこで動き方を変えることにして、教育委員会からランドセルが30個足りないと言

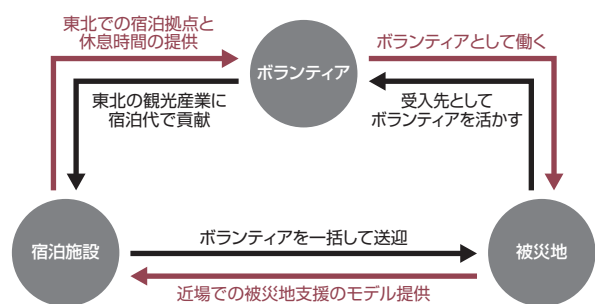
ば、翌々日にランドセル30個を手配したり、ボランティアセンターからスタッフが必要ないと聞けば、友人を紹介したりしました。こうしたことを積み重ねて、『相手が信頼できる』と思ってくれたら、こちらの想いを伝える、この順番ではないかと思うようになりました。

「打ち合わせだけの関係から一歩踏み込むため、よく現場の人とドロにまみれながら一緒に汗をかくことにしています。JAの方と一緒にイチゴ畑で、ドロの撤去作業を行ったり、コミュニティカフェを立ち上げる方と施設と一緒に掃除したりしていました。一緒に汗をかいた後の休憩時間。この時間は、心と心が通いあった話ができるので、相手の方が困っていることを聞きたすことができる、ぜいたくな時間だと思っています」。

「どんなに忙しくても、毎日、朝晩にボランティアセンターに必ず顔を出すことにしています。特に何かを打ち合わせするわけではないのですが、そこにいる人たちに、『おはようございます』とあいさつをする。そして、『いつもいる』ことを伝えることが大事だと思っています。こうした動きに変えてから、活動の幅が広がってきたのではないかと思います」。

被災地支援プロジェクト「ふらっとーほく」を発足

「震災後、『ふらっとーほく』という温泉宿に泊まってボランティアに参加していただくプロジェクトを企画。ボランティアに來たい人、宿泊施設、被災地の三方良しの取り組みとして好評を得ました。この企画は、ボランティアセンター縮小に伴い7月末で終了することになりましたが、『ふらっとーほく』の活動が終わるわけではありません。8月からスタッフを増やして、『ボランティアと地域の新しい関わり×まちづくり』をテーマに、新しいプロジェクトの掘り起こしなどを行っていきたいと考えています」。



●「ふらっとーほく」URL
http://flatohoku.jp/why_onsen/

小さくてもいい。自分たちが被災地に何ができるか

「小さくてもいいので、自分たちが被災地にできることって何かないかな」。亘理町での経験などを紹介した後、松島さんが生徒たちに問い掛ける。生徒たちはA～Fの6つのグループに分かれて、「今すぐできること」「将来できること」を話し合った。そして、「自分一人・グループ・みんな」でできることを大きな紙に書いて発表した。

松島さんはこうワークショップを締めくくる。

「発表があったことは、実は今すぐに一人でもできること。でも、一人よりみんなで行動すれば大きな力になります。皆さんは、震災復興の担い手です。最後にもう一度聞きます。『近い将来大地震が起きたら皆さんはどう行動しますか？』」



◀生徒たちが発表したことができること

区 分	今すぐできること	将来できること
自分一人	・節電・節水・節約(A・B・D・E) ・リサイクル(B・D) ・無駄なものを買わない(D) ・食料を無駄にしない(D) ・呼び掛け・応援活動(F) ・ボランティア活動(A)	・募金(A) ・寄付(A) ・ボランティア活動(F)
グループ	・ゴミを増やさない(D) ・協力する(D)	
みんな	・募金(F) ・節電(C・E) ・支援物資(C) ・ボランティア活動(B・E)	・支援活動(F)・支援物資(E・F) ・プルタブ集め(B) ・応援活動(A)・募金活動(E) ・ボランティア活動(B)

自分にできることを続けたい

東日本大震災の津波被害で母の知人が亡くなり、母と一緒に支援物資を山元町に届けました。今回、ワークショップに参加して、一人よりもみんなの力が集まれば、被災地のためにできることはたくさんあることを学びました。被災地を支援する方法はさまざま。今後は、「どう行動するか」を考えながら、自分にできることを続けていきたいと思います。



白石中3年
 ろくこう
 六郷 連さん

新しいまちづくりに挑戦

松島 宏佑さん

白石市出身。平成22年5月、島根県海士町のまちづくり支援会社「巡の環」に入社。社員として、離島への移住促進などに取り組む。

●まっつのブログ

<http://blog.livedoor.jp/mattsun00/>



これまでは、「ボランティア」というきっかけを通して地域のファンを増やすことを目的に活動してきましたが、今後は一度現地を訪れた方といかに「ゆるく長いつながり」を持ち続けていけるかが重要ではないかと考えています。

そのためには、「亘理町は元気にやっていますよ」といった情報発信やツアーの企画、現地の方の想いを具現化する支援などを、3年間は亘理町に居続けながら取り組んでいきたいと考えています。

亘理町の皆さんや県外のボランティアの皆さんなどと一緒に、「新しいまちづくりに挑戦する」。この志で一步一步進んでいきたいと思っています。



希望

津波で被害にあった畑で6月下旬に見つかったイチゴの苗。「人は希望が見えると頑張れる」。亘理町の美味しいイチゴが一日も早く食べられる日がくることを祈って！

コミュニティカフェ・亘理いちごっこ

5月初旬、手作り料理を提供するコミュニティカフェが亘理町にオープンした。り災証明を持っている人は無料。一般の人でもワンコイン(500円)以上の志で温かい食事をとることができる。カフェの代表を務める馬場照子さんは震災直後、避難所の炊き出しなどに携わる中「避難所生活などで栄養の偏りが気になりました。全国から集まる支援物資も効率的に回せるのではないかと考えました」と、設立のきっかけを語る。

オープンに当たっては、松島さんなどのボランティアも協力。馬場さんは「多くの人たちと語り合う機会を得て、衣食住が足りることだけが幸せではないと感じました。人として生きがいを持つことや喜びを見いだしていくこと。そして、人のつながりに支えられ一歩も二歩も踏み出していくこと。人によってそのケースはさまざまですが、人とのつながりを大切に活動していきます」と話している。

亘理郡亘理町字下小路29-1 (亘理小学校南門前)

☎090-4043-5216 (支援物資を送る場合は事前に連絡を)

火・木・土・日曜日 11:30～18:30 (駐車場有)

<http://watari-ichigokko.blogspot.com/>



▲食へに行くことが支援になります。ぜひ、ご利用ください。